

ザルツブルグとウィーン —モーツアルトの魅力に出逢う旅—

(1、25〜1、31、2005)

バス待ちが寒いから東所沢をさけ、普通り、西日暮里経由で成田についた。ダイナーズのツアーだが実行者は阪急交通社である。



ザルツブルグへ(一日目)

静謐がイメージとなる旅にであえたのは何としあわせなことだろう。

ウィーン空港もはずかで、人も少なかったが、そこでオーバーを脱がされくぐったゲートは静寂への門出だった。空港の真ん中に放置された双発のジェット機にバスから数十人がのりこむ。一人一人の体重チェックがいらないかと思う程の小型機に太めすぎるスチュアーデスが二人。わからぬ言葉の挨拶のあと、機は明るみの残る西空にむかって飛び上がる。成功と叫びたくなるほどの、機体の動揺である。

ウィーン着陸前に観た氷の敷き詰めた大地も今は黒く塗りつめられている。小山を越え、岡を滑って、機は真つ黒な大地をはっていく。スペインへ飛んだ小型機を思いだした。あれはもつと小型だったが、夕焼けと窓外の暑さが私を陽気にした。今静けさの中にいる。狭い通路いっぱいには台車を広げ、太めの女性は飲み物のサービスを始めた。機がバランスを失しないか、と気になった。言葉はわからないが、ダンケ・シェーンとつぶやいた。自然にできるものである。

騒ぎは一時、また静けさにもどった。勿論ザルツブルグへ向かっているはずだが、このままで十分であった。

五〇分もどと、機は下降を開始した。山の中である。飛行機は見えない平地に着陸した。遠く火がともっている。数機の機影もみえた。広場のど真ん中で機は停止した。

バスがよつてきて、もよりの明かりのなかに連れていってくれた。ここは超ミニ・バツケイジ受領場である。

雪が静かに頬をうつ。音はない。大地に積もるほどではないが、雪は大地もうっている。「ザルツブルグ ウォルフガング・アマデウス・モーツアルト・インターナショナル・エアポート」である。

4キロの道程だったが、軒をすりぬけるようにバスは進んだ。雪道になれない私には、程よくもった景觀は、異国なだけに魅力があった。窓の縁、電球、そして屋根の枠と、雪のない枠組みが一層家々を浮き立たせてくれた。

クラウン・プラザホテルは小ぶりだが品がいい。アメリカンスタイルではあっても、ザルツブルグの品を感じさせる。ヨーロッパでは新しいタイプだろう。最近の建材をつかっていた。

時差8時間で、今朝は5時起きだったから、そろそろ一二時間になる。

モーツアルト週間（二日目）

夜はウイーンフィルの予定だから、余り疲れたくない。それに小雪で、出歩きたくない。でも予定通りに動く。

ザルツブルグ内の地名は断片的にきいているが、現地にくると、一度に沢山蘇ってきた。

ホテルのすぐ裏、正しくは道路をはさんだ前のシェラトンホテルの裏がミラベルの庭園である。モーツアルトの室内楽曲を集めて作ったLpにこの名があった。ジャケット表紙は見事なお花畑だったが、今は全て雪、ゴムグツをはいてぞろぞろと、ガイドの伯母さんをおう。白のなかに泥道が走り、ひたすら下を向いて前の長靴を追う。

ミラベルの宮殿で、説明を聞いていたら、著名な階段を下りてきたツアーグループの中に、八重子の知人がいた。当然「キヤー」という叫び声があがる。階段に並んだお茶目な天使像は顔負けである。

「右はカラヤンも学んだ音楽大学でございます」との説明。ここはモーツアルトとカラヤンの街である。カラヤン死して五年、美名だけが残ったようだ。モーツアルテムという名はそのまま日本語となって、このオーケストラは沢山LPを出している。それに続いて市立オペラかと思うカンバンが並んでいた。オテロ、フィガロなどなど、こんなものがあるかと不思議に思ったが、後から調べたら、マリオネット劇場だったらしい。テレビ化されたものを数本みたことがある。決して面白いものではないが、一つの芸能なのだろう。ガイドは無視して説明抜き、その隣のカラヤン亭の説明に追われている。生れた家とかで、名だたるプールつきの邸宅ではない。でもここに銅像が立っている。まあこうでもしなければ、音楽祭を

世界的にしたカラヤン先生に顔向けできないのだろう。



カラヤン邸

橋を渡るとき、山の上にホーエンザルツブルグ城が覗いた。ここは雪のザルツブルグで最も美しい景観だった。山の高さの割に城が高く、普通より、建物の威力を感じさせる。エジンバラもそうだったが、ここの方が横幅が広く立派に見える。この城は街のいたる所から見える、以後自分の居場所の確認に便利させてもらった。

ザルツアツハ川にそって歩き、いよいよ旧市街と呼ばれる一帯の中心部に入る。

ゲトライデガッセは旧市街の中心通りで、モーツアルトの生家はここにある。

音楽とは全く違う一生、残された似顔絵などから美しい家である筈はないが、全くの淋しいただ住まい。四階まで上がっても、何も無い。そういつてもいいほど貧しさを反映している。これでいいのだ、と自分は思うし、思わせるが、このザルツブルグの繁栄とは違った天使の悪戯であろう。アマデウスのアタマの中にだけ、今の華麗さが、地球の未来の陰鬱さが潜んでいたに違いない。

それに何たるピアノの粗末さ。ここからどう考えても今のCDの音さえ想像できない。工業の凄さ、現実の虚構が浮かび上がる。アマデウスがこのピアノの音とアタマのなかの音とを同時にきいたであろうか。もし彼が今内田光子を聞いても、やはり自分でアタマの中の音を聞いたに違いない。工業製品さえ虚構で、真実はモーツアルトのアタマの音だけであろう。

生家をでた。子供たちが集まっていた。この中にモーツアルトの血が少し流れている。そう思ったら、呼び掛け、カメラを見せたら数人がポーズをとってくれた。私はすかさずシャッターを切った。最高の出来になった。

私は銅像をみるのが下手で、観てすぐ忘れる。生家の傍のアルター・マルクト広場にある聖フローリアンの銅像も、モーツアルト広場のモーツアルトの像も殆ど覚えていない。広場の隅に店を開いていた車の屋台が、強く目に浮かぶ。この雪で売れるかな、と思ったことまでも。

レジデント広場についた頃は大体体が冷えていたから、この大きな建物でも少しは暖がとれるかと思ったが、ここも寒かった。レジデンスは市役所かとおもったが、ここは古い宮殿、市民とは全く異質の暮らしがあつたのを思いしらされる。ギャラリーはいく程のこともなく、他もどこにもあるものと似て、印象は薄い。ザルツブルグは塩の街として特異に栄えたのであろうが、今私たちが世界各地を歩けるようになると、田舎街にすぎないのがわかる。

案内のイヤホンでの日本語が操作も内容もよかった。

この一帯ではドームと呼ばれる大聖堂を除けば、殆ど特色はない。大聖堂はモーツァルトと関わりがあったと聞いただけに、それにここで、コンサートがあるとも知っていたから、興味があつた。大きなエントランスの4人の守護聖人の石像が目につき、色もついでいて生々しく、「ドンジョバンニ」の騎士長を思わせた。しかし入り口は狭く、つまり入場料が必要かと思つたが、喜捨だそうである。

中に入った。スペインやイギリスの巨大さはないが、慎ましさに好感がもてた。棺はあるのだろうか、目立たない。どの聖堂に入っても、正面を向いて暫らくじっとすることになっている。ここでは説明がないだけに気が散らない。

恐ろしく左右の釣り合いがよい内部の調度配置だった。

ザルツブルグのこの辺りには大型機械が入つて、建設中の場所がおおい。来年が生誕250年ということで、準備をしているのだろう。ホーエンザルツブルグ城のある、山裾には祝祭大劇場があつて、辺り一帯が芸術の施設である。崖を削り貫いての建造が中心らしい。大、小それにフェルゼンライトシュエレの三つのうち、小劇場が改修中とのこと。全体を傍から眺めたが、何のことはない、横に伸びたショッピングモールのようだった。ここに世界の金持ちが集まり、新しい音楽の方向を示すのだ。世界の中心とも言える。今は人もなく、旧貴族の厩舎といわれた方がわかる。

外は、雪はほとんどないが、横殴りの雨もあつて寒い。高級ブチツクのあるビルに入ったら、打合せてあつたとみえて、みんな閉じていたのに2軒だけ空いていた。勿論女用ばかり、ふと気がついて一つをアタマに乗せたら「似合う」と同行者にはやされ、買った。寒さから少し解放された。



ツアーのヒル食は、私は嫌いだ。大勢が同時に飯を食うこと事体ありがたいがたくない。外からみれば、家畜の食事と同じに見えるし、それに私は遅い。ツアーの場合旨くないのが普通で、阪急交通社は特に配慮にかけて、粗末である。今回も同様。中華だったから食べられないことはなかったが、楽しくはない。

食後はモーツアルト美術館で流れ解散。これは珍妙な美術館で、シヨウでも観させられるかと思つた見掛けだが、中身は真面目な企画。モーツアルトはここで育つたそうで、そこに日本の企業が中心となつた事業団が収集した遺品を展示したらしい。生家が世界遺産になりそうなら、ここは今の反映。便利で見易くできている。

誰かモーツアルト狂いの日本の老人が、生家が余りにも貧しいのを哀れみ、企画したのではないか。そうだといって、大事なものはみんな博物館や図書館に行つてしまったから、こんな管理の悪い場所におけるものもない。展示内容は淋しいかぎりだった。

二〇世紀の仕事としたら、オーデオやビデオだから、死者のコレクションでもここに集めて保管し、コピーを希望者に分ける仕事でもしてくれた方がよいように思う。それほどに観るべき内容がない。

二〇世紀後半、ここはモーツアルトの街である。人は彼を慕つてあつまる。其の割りに何も無い。

三時近くなり、夜のコンサートが気になり始めた。バスにのるのもどかしく、歩いて来たのだから歩いて帰ろうと、方向だけを見定めて、雪のとけかけた道を歩く。途中で足疲れと方向が不安になる。

ライナー通りというのが目標だが、これがそうだという保障はみえない。まあ大きな街ではないから、と、たかをくくつて歩いたら、本当にここがライナー通りだった。クラウン・プラザが突然現われた。橋の位置を間違えていたのが、地図を見る目を狂わせていた。靴の汚れを少し気にしながら、横の玄関からホテルに入った。

メータ指揮ウィーンフィルという組合せだった。東京なら私は行かない。ここでは仕方がないだけでなく、期待さえあった。七時前についた。七時半開演なのに会場はガランとしている。奥の方で一〇人余り、ワインを楽しんでいる人がいた。案内人も見えないから会場らしいところの扉を開けようとした。するとどこからか大男が飛んで現われ、「ナイン、ナイン」という。間違えたかなと、一瞬思ったが、早すぎるのは、彼の身振りでわかった。「だって七時だもん」といったかったが、言葉はでない。このホールは2000人以上は入る筈だから、三十分で整理がつくかと、気になったが、そこは楽しむ国である。何も定刻に始める必要はないのだ。開演目安に過ぎない。

外国のホールはどこでもそうではないかと、思うが、チケットを切ってもらってから、演奏場所までの間に空間が広くとつてある。部屋と廊下、或いは廊下が二本、だから遮音なんてそう気にしないでもすむ。その他にワインを楽しむ場所がある。シャンデリアが輝いているほどではないが、これらの空間は休憩時間をくつろぐのに役立つ。それでもそのときは、かなりの人ごみになる。社交の場所と聞いているが、千人程度ならともかく、二千人のホールでは最早怒鳴らねば話せぬ混雑度。音楽ホールでの宿命の一つになってしまった。

来客の服装は日本よりフォーマルで、タキシードが目立つ。背広が惨めに感じられる程である。音楽会場は美しくあらねばならないのだ。見にくい体となった、男も女も、それを服装で回復するしかない。姿勢と立つ姿も彼らは美しい。我らはおろおろしている。会場は横にも奥にも広く、照明はそれ程強くない。木が目立つ壁面に、天井から下げたマイクは紐のようで、モービルの感じがする。一九六〇年開場だが、そのあと何度か改築したらしい。

メータが遠くに入ってきた。モーツアルトの二九番のシンホニーが静に始まった。音が



いい。力みがないのだ。メータがこんな音を要求するとは思えない。なめらかだけでなく、伸びもいいし、響きもある。夢にでてきたウイーンフィルである。東京できくと、もつとぎしぎしした音になる。第一たいていのホールは残響はあるが、もやつとした感じがつきまとう。サントリーはひどい。

メータは立っているだけなのだろうが、何ともたおやかな演奏だった。

次がクリスチヌ・シェファーが入った演奏会用アリア k 369、505、580。シェファーもどならない。実に肩の力が抜けた美しい声で歌う。去年のオペラシテイーはダイナミックレンジの広さをまざまざと見せ付け、それを武器に表現力の大きさを表したが、今日は見違えるよう。音楽は日々の糧であると教えた。お母さんのこんな歌が聞けたらねえ。彼女は母である。

最後までメータの巨体に隠れ、彼女の歌う姿は見えなかった。

休憩のあとのハイドンは104番のロンドン。俺はロマンチックなんだと誇示しているような響きが音に感じられる。おや、ハイドンはモーツアルトからの脱皮を願ったのか、とまちがうほどの音の厚み。ウイーンフィルは楽な気持ちで演奏できたのでらう。音の透明さが大分違う。モーツアルトは欠点がすぐ見えるから難しい、と演奏家はよくいうが、実際の演奏ではハイドンとモーツアルトの音の違いはわからないから、何時も不思議に思った。今日はそれがはっきりわかった。ハイドンはメータにぴったりの曲だったのだろう。楽しめた。

雪をよけながらバスにのり、十五分でホテルについた。幸せな音楽会である。

ウイーンへ（三日目）

二七日はウイーンへ向けて走る。山のなかをバスが行くから当然雪、一帯は観光地で、天気なら美しい筈だが、残念ながら何も見えない。冬の旅は空いている分だけ得で、見えないだけ損である。五時間走ってウイーンの町並みに入った。ここは

薄汚い。雪が斑である。凡その地形を理解させようと、あちこち走ってくれるのだが、もともと興味がなく、著名な建物の名を知らない。私は歩かないと名前がアタマに入らないタイプである。

ヒルは肉料理で、少しはましであるが、喉に引つ掛ける恐れがある。一時半で腹は空いている。ウイーン人の親日性がみえるようなウエイターの接待で和やかに時が過ぎた。

着いたホテルはインペリアル。まあ帝国ホテルである。日本からのツアーはよく使わらしい。調度が落ち着いていて、しかも明るい。よいホテルの典型である。キンピカも適度だ。私は音楽を聞きにきたのだから、それ以外今回は関心がないが、ホテルがいいのは有り難い。アメリカンスタイルも使いやすいが、胸をはって歩く気持ちになるのは、この種のホテルである。我が家の貧しさは忘れる。複雑な道具ではないのに、ブラインドのしめ方がわからなかった。聞けば二重窓の間にブラインドが落ちる構造とのこと。



キーシンとムジーク・フェライン
オプシオンということだったが、思わぬ拾い物がムジーク・フェラインでコンサートが聞けることである。誰でも世界一と評価するこのホールはどんな音がするか、興味だけでなく、西洋音楽の音の理想はどんな響きかを知る上でも大事な経験となる。こんな気持ちが強かった。

建物は音楽専用。したがってホールの周辺がどうなっているかも興味があつたが、これはオペラホールと違って簡素だった。二〇〇年の歴史があるから、今と事情が大変ちがっているにせよ、音楽をやる場所と外部との遮断は簡単で、サントリーホール並みである。クロークも粗末、休憩時間のホワイエも大きくはない。オペラとコンサートは基本的に違うのがはっきりわかる。しかし音楽会場に辿り着くと様相は急変する。

視界に黄金が広がる。至る所に彫刻されており、柱さえ女神であり、壁も凹凸がある。彼らは基本的に平面を嫌うのだろう。天井は遙か上、2階からみても普通のホール以上に感じるに違いない。しかもどっしりしていて枠で仕切られているだけでなく、面の凹凸が激しい。天井画も見事だ。聞くところだと、この上に砂が数トン広げられている。

舞台上正面を飾るのはパイプオルガンで、それを巻くような小廊下と手摺りが目につく。舞台の左右は数メートル幅に楽屋に向けてあいている。そこに椅子がおかれていて、お客がくるよう設えられている。

椅子の配置にも特色がある。左右が高くなっているのは紀尾井ホールでみるが、辺り一面椅子だらけの感じがするのは意図的だろう。人を詰めることより、平面をさけているようだ。舞台のすぐ下から椅子である。ホールが狭苦しく感じられるが、座っているとそうでもない。前三列は外せるのか、席番号が違う。私は二列九番だったが、実際は五列目だった。

キーシンがベートーヴェンの第四ピアノ協奏曲を弾きはじめた。ウン・タ・タ・タ・ウン・タ・タ・タ・と問い掛ける音が、それほどロマンチックにはひびかない。ここは残響二秒の筈だがと思う。しかし音は響いている。ローレン・ホスター指揮のウインシンホニカの音が答えるがこれも同じである。ロマンチックではなく、むしろぶすつとした音である。やりとりが続いているうち、このホールの響きの特色がだんだんわかってきた。私がサントリーで嫌がっているワーンという余計な残響がないのだ。ゲルギエフを聞いたときなど、そのお陰で音楽のニュアンスが消えてしまった。残響二秒が強調されていると思えない。余分な響きがない。これは凸版ホールでは随分へっている。

ムジーク・フェラインの特色はまさにこのことにあると、私は信じる。ほんのわずかな残響の残響。これがこのホールでは吸われ、音楽に必要なザツハリツヒな音になっている。音が固まっている感じである。音楽を聞くには実にいい。その魅力につかれると、ベートーヴェンは心に入ってきた。

キーシンは音の綺麗なピアニストと聞いていた。透明な音をだすが、日本語の奇麗さのイメージとは違った。しつかりした音をだす。粒立ちのそろった音である。しかもひとつひとつしつかりした音でひく。ごまかしはない。

どうも四番は合っていない。ロマンチックに響かないのだ。あんまりはつきりと音楽全体が聞こえてしまうから、曲想との違和感が生れたように思った。

これが「皇帝」では長所とでた。見事な構築で、こんなに堂々と威圧を感じた「皇帝」は聞いたことがない。キーシンが本物であるのをいやが上にも感じさせた。バロダスなどベートヴェンではごまかしを感じるが、キーシンにはそれがいい。彼の手抜きのない演奏は最後まで持続した。第三楽章は往々流している感じになる。何度聞いたかわからない「皇帝」がこんな感銘を与えてくれるとは。

アンコールでさまざまな側面をみせてくれたキーシンは絶頂であった。

オケはまずまず、コンサートマスターはこんなにも苦勞するかと思う程の気の使い方である。目の前にみたセロはかなり真面目に弾き続けていた。

よく見える位置にいたからオケの中同然の感じだったのだろう。美しいというより、見事という表現があたる、ウイーンシンホニカではあった。フォスターは近衛くんの言通り、平凡である。

ムジーク・フェラインの裏にインペリアル・ホテルがある。クロークの雑踏を抜けさえすればホテルのフロントまで数分。こんな贅沢な音楽会はない。

ウイーン見物（四日目）

晴れた。こちらにきて初めてである。シェーンブルム宮殿と王宮というオプショナルツアーにでる。バスで三〇分もたたず、宮殿に到着。一〇時についたが人はいない。テレビでみた宮殿は数百メートル先にあったが、そこまでは雪である。宮殿の金はいつも花と重なるが、今日は雪。悪くはない。



最初の大ホールは新年のニューイヤーコンサートでバレリーナが群舞する場所。まことに雰囲気が出合う。彼女、彼らのたおやかな身体の動きが目に浮かぶ。天井の絵画が大きく、シャンデリアが似合っていたのが目に残る。ここはキンピカシューンプルムを代表するような、部屋だった。他の部屋も絵画の重みは少なく、壁の装飾が目立つ。王宮は絵や道具で壁を飾るが、ここは織物や凹凸で繕う。ハプスブルグ王朝は世界に冠たるものに違いないが、そんなに贅沢ではない。大女帝マリアテレジアの性格のあらわれではないか。広大な庭園の彼方にグロリエツテが建つ。手前は芝生の筈が、今は雪。子供の足跡がめだつ。この広大な景観に贅沢を感じた。

ウイーンのモーツァルトはザルツブルグほど惨めではない。戴冠式に参加している姿、王女に可愛がられて、「結婚してあげる」と言った逸話など、彼は上流社会の一部に組込まれている。しかしオペラの初演の話になると、ウイーンは好意的ではなかった。彼は少し早く生れ過ぎたのかもしれない。

三〇分余りで、お茶を一杯飲んだら次の予定の時間になった。

王宮（ホーフブルク）はホテルに近いブルクリンクにある。広い芝生を歩いているのだが、雪で足元が危なく、観光を楽しむゆとりはない。ミヒヤエル門から旧王宮に入る。オーストリアの歴史から皇帝の名を知るというより、音楽に関係がどうあるか、で名を知っている。ここはシュトラウスのワルツにあるフランツ・ヨーゼフ一世、それにギエムの踊るシシー（エリザベス皇后）の居城である。名君の皇帝の部屋をみて歩き、粗末さに驚くが、シシーは今人気の女性で、そのための展示が目をはひく。



誠に観光の時代である。治世の時代と後世の評価は大分違うのだろう。ことに奇行があった、シシやバイエルンの王様のように若干常軌を逸している人が、今、人気がある。奇行ゆえ憶えやすいほか、奇行に憧れる庶民心理もある。彼らの行動に潜む、異常な孤独感などは気づかれない。

王宮をでて、スイス王宮礼拝堂を通り、アウグステーナ教会に入る。前者はウィーン少年合唱団が日曜に歌い、後者は王家のミサのためブルックナーがへ短調ミサの初演をした場所である。

私はアウグステーナ教会に魅かれた。ここはハプスブルグ家の納骨堂が地下にあり、代々の心臓が保存されている。心臓と他の臓器、骨を分けて納骨するという神経の強さは、西洋人ならではのもので、この教会に座っているだけで、心の安定が失われてくるように感じた。

教会の前は街である。グラーベン一帯と呼ばれる繁華街でその一部で食事をした。勿論貧しい感じは否めない。

帰路は殆ど我らだけで、ホテルへ直行した。雪道を歩く元気はない。

夕食はインペリアルで一同会する、と思ったら自由行動をしたグループが半分近くあり、少し淋しい食事となった。まあそこは添乗員山岡さんの慣れた処置で、一〇人余で楽しく会話が弾んだ。音楽という共通の話題があつて、立ち入った話も気軽にできる。

今日は音楽会がない。フォルクスオペラは「ウエストサイド物語」をやっているが。

ウィーン国立歌劇場

小沢のフィガロ（五日目）

少し疲れ気味と思つて今日のツアーは休んだ。退屈どころか、予想外に眠れたのだ。判断がよかった。

オペラは七時である。

バスでいくほどもなく、歩いた。あとで知つたが横手から入った。こんなところにもクロークがあり、手際よくあずけたが、

入り口がわからない。外国ではどこの劇場もそうだが、チケットのもぎりのお姉ちゃんが目立たないのだ。黙って入ることはできないが、探す手間がかかる。それだけで何となく行動の自由がまし、うろうろしてときにはタダではいった感じを抱く。

歌劇場はテレビでお馴染みで、高さがある。五階にしても上野の比ではない。座席は狭くはないが、前の人の頭が邪魔になる。古いせいだろう。日本の劇場の方がいい。

オペラが始まる。まあ舞台が大きい。九列一四番と悪くない席ではあるが、舞台に圧倒される。1幕は例のベットの場面で広さはいらぬが、ボネルの演出でビデオでみたように、正面に二階があつて、そこから人が下りてくる。その動作にゆとりをかんじる。スザンナ（タチアーナ・リスニーク）がいい。ケルビーノはどうも適役ではない。伯爵はキーリンサイドでこれは見事だ。オケが少し乱れている。

幕間に場内見物をやった。横にマーラーの間があると聞いたが、これは大したことではない。正面については余り記載がなかったが、驚くほど見事で、貫禄がある。五階建てを完全に使いこなし、入り口が内部への期待をいだかせる。立像が各所にあつて、日本にはみられない風格を劇場に与えている。日本人と知って呼び掛けられ、劇場の写真がだされた。小沢さんの手前買った。

二幕は、まだ見たことがない、舞台で、金属製の格子に囲まれた伯爵の部屋、お客は見えるが、演者には密室、スザンナと伯爵とのやりとりも秘密である。比較的さっぱりしたやりとりに仕上げられている。これが結婚式に切り替わるとき、鉄格子は取りのぞかれる。



二幕と三幕の間の休憩はない。だれやすい二幕がよくぞ快適に進んだと思うが、小沢のテンポよさのせいだろう。伯爵夫人の aria もさっぱりしたものである。でも音楽はいい。音も合ってきて、乱れは感じられない。

三幕は格子が外され、解放系となっていて、伯爵以外の人が自由に使っている。裁判、結婚式もここで行なわれ、フィガロの親がみつかる。この他愛もない結末も、伯爵夫人の復讐が未解決であり、興味が継続する。ここいらあたりが、「ドンジョバンニ」より、「魔笛」よりよくできていて最後までみさせる。夫人の嘆きも比較的あつさりとは扱われ、20年前のボネル解釈は当世向きに変質している。しかし音楽は結構歌っている。サイトウキネンの小沢とは別人の感がある。

四幕は巨大なマツで圧倒される。客席全体から嘆声ももれたから、だれない効果は十分にあつたらしい。最後に向かつてのドンチャン騒ぎは快調に進み、夫人が伯爵を許すところも勿体ぶつた感じがあまりなかった。フィガロはこれで十分と思う。小沢はいいモーツアルトを聞かせてくれた。涙はなくとも笑いがあった。

寒い屋外も数分でホテルについたから、苦痛はなかった。楽しい一週間は殆ど無事に過ぎ去った。

東京へ（六日目）〔七日目〕

出発までの一時間を裏の楽友協会ホール前をうろついて過ごした。先日のキーシンが夢のようである。ビラにヤンスンズの来訪を告げていた。

空港までは三〇分足らず、ウイーンは全てに調和がとれている。空港も小綺麗で、デッキも近い。舞い上がれば美しい町並みが覗ける。短い滞在で、現実のウイーンをみることも殆どなかったが、私には音楽で十分であった。七日目の午前成田について、バスで東所沢に向かった。

▪